

南 方（フィリピン）

英靈の五十回忌法要を営み、戦った

アノ戦闘の記憶を辿る

滋賀県 伴 八三

昭和十七年一月二十七日夜から二十八日の朝に至り、我が中隊がバターンの激戦で全滅に近い損害を蒙ったのである。平成三年一月二十七日この日、今ここに元比島派遣軍垣部隊九、九会で戦没英靈の五十回忌法要を京都東山霊観音でご住職様のご協力により営みました。

武運つたなく護国の桜花と散り行きし戦友諸氏のご英靈の叫びが我が胸を打ち、時既に春秋五十年の歳月

がすべてを忘却の彼方に葬り去り、今ここに懐かしの想い出となって記憶も新たに蘇る。先ずは英靈に心からなる祈りを捧げ、法要にお世話下さった方々に感謝申上げ、戦って来たアノ戦闘の記憶を辿ってみたいと思います。

昭和十五年一月十日、現役兵として歎呼の聲に送られて懐かしの郷土を出発し、京都伏見歩兵第九連隊に入営、基礎教育を受けました。賀陽宮殿下配属連隊の名譽と、きびしい教育の中で第一期の検閲も無事に終わってホットしたところで、「衛生兵を命ずる」との命令が出まして、歩兵より衛生部に転科し京都陸軍病院へ毎日通修衛生教育を受けることになりました。

これまでの歩兵教練とは異なり、毎日机にかじり付いて勉強に励み実習も受けました。

歩兵教練では手榴彈の投擲練習ばかりでしたが、上陸演習にvari繩梯子を下りて舟艇に移乗訓練で上陸演習が盛んに実施されました。

昭和十六年九月末、突然外泊が許されて懐かしの我家で一泊を楽しく過ごして帰隊すると、十月一日に動員令が下り応召兵の入隊の準備で忙しい毎日でした。応召兵が入隊し、九連隊は再編成されて何処に行くとも分からずに夏服の新品が支給されました。南方だと思われる。

十月五日でした。東条首相兼陸軍大臣の巡視がありました。十六年十月十八日夜、留守隊の皆さんの見送を受け、「身体に気を付けて元気で頑張れ」と励まされて、皆と別れを告げ、軍機保持のため各中隊別々に、(九中隊は南門より)住み馴れた藤の森の営舎を出発しました。

梅小路で軍用列車に乗車、鎧戸を下して勇躍深夜秘密裡に出発した。十九日夜明け大阪港で輸送船「平安丸」に乗船して中を見ると、上部は二段の棚で窮屈で、船倉には馬が乗っており、換気も悪く、熱気をおびて

苦痛もこの上なしの状態だった。私は指揮班に属し、皆んなで下給品を分け合ってお喋りをしながら家族以上に楽しく過ごしていた。

大阪港を後にして門司港外で投錨、十一月二十二日故国の山河とも別れを告げ、再び何処にと恵みをお祈りするのみ。十一月二十四日揚子江河口の飯田部隊長戦死の地、飯田栈橋着。部隊長殿のご冥福をお祈り致しました。

二十六日出港、二十八日に台湾基隆港到着。待機する船内で、これだけ読めば必ず勝つと言った本を一人一人に渡された。内容を見るとフィリピンに行く事がわかって来た。

十二月十七日基隆港一杯の輸送船を海軍水兵が帽子を振って応えてくれる。護送艦を頼みに大船団を組んで堂々と出て行く。一路フィリピンへと向かった。

十二月二十二日比島リンガンエンに到着、愈々敵前上陸だ。波風が荒かったが夜明前完全軍装で甲板に集結。今までお喋りばかりしていたが、だれ一人として喋る者もなかった。ただ命令を待つばかりである。海

は真つ黒で波は高そうである。うす明かりに椰子の林がぼうつと見えてきた。少しおくれたようだが命令が下り舟艇に移乗開始、繩梯子でおりて波の上下を考へながら飛び降りなければ怪我をする。上陸演習のお陰で皆な無事に移乗が終わり、舟艇は母船を離れて行く。銃声が聞こえる。激しくなつてきた。第一大隊が上陸をした様子である。戦闘が開始されている。我が第三大隊は波の為に少しおくれたようである。岸の近くまで来た時におし寄せて来る高波を二、三度かぶつて舟艇が沈み、飛び込んだ工兵隊の援助で全員無事に上陸に成功。敵影も無く、幸いだったが、第一、第二大隊は苦戦。応援に向かったが相当数の犠牲者が出た模様である。

目的地ナギリアンに向かつて前進を始めた。細い山道を行くと突然にバンパンと銃声がした。始めて攻撃を受けたのでどうして良いか分からない。木陰に伏せた。ピュンピュンと弾が飛んで来る音がする。初めての経験で緊張をした。幸い僅かの敗残兵だったので前進を続行。やはり戦争に慣れ、弾音にも慣れないと駄

目であるという事が分かった。常夏の太陽に鉄帽が焼け付くナギリアンに到着した時は夜だった。敵影も無く無血占領で幸いでした。

夜はたばこの倉庫の中でたばこの葉の上で寝ていた事を想い出す。敵はマニラに向かったようである。南国で初めての夜明けである。東の方向に選擇をして無事であることを祈った。

朝になると第九中隊はバギオに向かうよう命令が出ていて、第二小隊が尖兵となり出発した。途中道路が破壊されていたが、日本軍が上陸したというので敵も予定の行動をとっているようで、第二小隊が歴史的な無血入城を果たした。監禁されている日本邦人を救出したので、日の丸の旗で邦人が迎えに来てくれた時は何とも言えぬ気持ちになつて涙がこぼれた。

バギオはマニラに次ぐ第二の都市である。松の木があり一面に芝生が敷きつめられて高級住宅が並び、色とりどりの住宅が点在していて絵に書いたようである。このバギオで昭和十七年の正月も平穩に迎えたのは幸運であつた。

連隊はマニラに向かつて前進をしていた。タルラックの激戦で上鳥連隊長が戦死を遂げられたと言う悪い知らせが入ってきた。バギオ方面の敵は友軍の爆撃開始と共にマニラ方面に向かったようである。バギオ市内の治安も回復、故郷を想い出す松の町とも別れを告げ、バギオ方面の警備の任を解かれ一月十八日、邦人の心からなる歓迎を受けて「バンザイバンザイ」と日の丸の旗で見送られながら本隊へ追及の命令を受けて出発した。

途中で連隊長殿が戦死を遂げられた、タルラックに立ち寄りご冥福をお祈りして、必勝の念に燃えた。バタンの前戦へ昼なお暗い密林のジャングルの中を進み、道無き処に道を開きながら口でいい表すことのできない難行軍であった。漸く台地に取り付いたとたん、私から三人目におられた加藤准尉殿が狙撃を受け戦死を遂げられた。遺骨を取り、道に迷い元の道に戻ると細い小路に枯れた竹が倒れてあって、知らぬ物だからつい蹉くと何処からとも無く木の上よりバタバタと射撃を受け、密林で何も分からない負傷者が出た。応急

手当てを施して衛生隊へ送るのに何日も担架で連れて歩き気の毒であった。

そのうちに食糧も水も無くなり、乾パンを分け合い、また、夜露を受けている太い蔓を切って水筒に水を受けているが、わずかであるが何とか渴きを凌いでいた。密林の中を迷う事十日間続いたが、漸くにして谷間に出るとサラサラと清水が流れている。この水こそ恵の水である。皆が喜んで顔を付けてがぶがぶと飲んだ。これ程に水の有難さを感じたことはない。水は生命の尊さも感じました。

元氣を取り戻して漸くにして道に出ることができた。負傷者を衛生隊に送ることができたが、残念なことに出血多量にて白木の箱で中隊に帰って参りました。もう少し早ければ助かる処、誠に残念でなりませんでした。本隊に追及すると我が第九中隊は犠牲者も僅少で最強の中隊として、敵砲弾や銃弾の雨霰の如く猛烈に落下のカボット台へと前進、十七年一月二十七日第一小隊が尖兵となりマリベレスの敵陣地に前進を開始した。真つ暗闇で何もわからない、地形も分から

ない、バターンは敵米比軍の演習場になっていて完全なる陣地が構築されている。

信号弾が上ると敵の砲弾が集中する。不気味な夜行軍である。前の者も手さぐりで進んで行く。急に停止した時バリバリと機関銃の音と共に曳光弾が目の前を走った。すぐに腹這いになって地面に伏せた。前後左右より機関銃・少銃弾で急襲、曳光弾が交差して走る。

幸い少し下がった処が窪地になっていたので伏せていた。第二小隊が迂回して一条の鉄条網をやぶり、歓声を上げて敵の陣地に突撃を開始したが、最後の拠点として必死に抵抗を試みる。陣地に屋根形の鉄条網が張っており、敵の猛射を浴びて副島少尉以下四十数名が壮烈無比なる戦死を遂げられた。多数の戦友を失い悔んでならない。負傷者も続出して手の施しようのない現況であった。

この副島小隊の犠牲により敵陣地の確認ができた。ひとまず引き下がり、負傷者を野戦病院に護送し作戦を組み替え、野戦重砲及び大隊砲の援護射撃により再

び総攻撃を開始したが、第九中隊は兵力を減少した予備隊であった。

しかし、予備隊続けと命令を受けて背囊をおろして水筒と乾パンを身に付けて腹這いになって進んで行った。夜中である。砂糖きびの焼けた匂いがする。曳光弾が頭上を飛んで行く。「ヤラレタ」と呼んでいる。近づいていったら臀部貫通であった。応急の手当を施して後方を指して下って行くように言って前進を続けていく。鉄条網があつて進めない。その場で壕を掘ることになった。幸い負傷者の円匙を持ってきたので身体の入る程度の穴が掘れ、安心と疲労により遂に眠ってしまった。

目が醒めた時太陽がカンカン照り付けていた。左右を見ると誰もいない。良く見ると深く壕を掘って入っているようである。折りを見定めて飛び込んで行った。三日三晩頑張った。後方からも連絡路を掘って乾パンを持って来てくれて有難く、感謝しながら食べました。途中負傷したのは私の初年兵の奥村衛生兵であり無事を祈りました。また壕の中で、書間一寸頭を上げた

木ノ下上等兵が狙撃を受けて頭部貫通で戦死を遂げました。命令に依り後退することとなり、遺骨を取って後退した。

後退途中で受傷した奥村君を尋ねて見ると、後退中敵弾を受けて戦死を遂げておりました。温厚で熱心に良く動いてくれて、私は片腕を取られた思いで残念で堪えられなかつた。心からご冥福をお祈りすると共に奥村君の分も頑張つて行こうと決意に燃えた。

兵力も減少して戦闘の能力も無くなり、充分に遺骨を収集することもできぬまゝ、後退することとなりました。

夜中にボソボソと下りて行き補充を待つことになつたが、マラリヤに下痢患者が続出した。私も下痢に罹り大北軍医殿から入院するよう言われたが、今入院をすると傷病者を見る者が無くなる何としても頑張らねばと鞭打ち、気力と精神力で克服することが出来て自分ながらに感じ入った。

バランガの警備の任を受け、バランガに向かつて行軍を続けた。バランガの町は崩壊されている。町はず

れに椰子林があつて東に川が流れていて西は道路に挟まれた所である。この林の中に壕を掘り、其の任に着いていた。

町の中央に教会があつて教会の鐘の塔が残っていたので、そこに監視兵が出ていて、町の前方に分哨が出ている中を米軍の将校が教会の下まで入り込み、監視兵に発見されて射殺されたが、この将校の勇姿には敵ながら感心しました。

バランガはバターンの入口の町なので毎日のように時を定めたように砲撃してくる。雷の如く音をたてて飛んで来る、ヒュウと前後左右に落下炸裂で壕が動く、爆風と砲弾の破片の飛び合う唸りが蜂の集団が飛んでいるような音で正に地獄であつた。幸いに林の中へは一発も落下しなかつた。この中に二柱の英霊の墓標が建てられてあつた。戦友が守つていてくれたご加護の賜と心から感謝を捧げて冥福をお祈り致しました。

誠に不思議なお陰をいただきましたが、敵が進入して来た時に第三小隊長浅川少尉と今井上等兵が戦死を遂げられて惜しまれてならない。漸く補充員到着した様

子であり、安堵をしました。

再編成されて第二次バターン攻略の準備が進められていた。バランガの警備の任が解けて、再び密林の中へと行軍。バターンの山中へ前進開始、行軍を続行、密林の中を工兵隊の苦勞により東海岸から西海岸へと道路が付けられていて非常に有難い行軍でした。ドンドンと砲声が近づいた。第二次バターン攻撃は第一次とは異なり連日の飛行機の爆撃と砲撃にてサマットの陣地も崩壊されて、敵の将兵がゾクゾクと降伏して下りてきた。

食糧の不足と疲勞のためにバタバタと倒れて行く。終戦後、問題にされたサンフェルナンドの死の行軍とさわがれたが、敵、味方共に同様であつて仕方のない現状でありました、誠に気の毒であつたと思う。

昭和十七年九月、ネグロス島のゲリラが激しくなつてきたのでバコロウドに移動することになった。ネグロス島に渡り討伐作戦に参加をした。この島は砂糖の産地で見渡す限り砂糖きび畑が続いている。ラカロウタセントラルの精糖工場の警備に付いて土囊の代わり

に砂糖の袋を使用。内地では砂糖も無くて困っているだろうにと誠にもつたない気がしていた。

次第にゲリラも少なくなつてきたので、住民がポツポツと帰つて来るようになって、医療機関も無くなり「スモルドクトル」と言つて近づいてくる。治療もしてやり、親しくなり、現地の米で餅をついたり、椰子の花からとれるお酒。一寸甘口でいける。「トバ」と言つているが飲んだり歌つたりまた踊つたりして平和が蘇つてきた。

ネグロス島の討伐が終わるとセブ島セブ市に移動。セブ島は山ばかりで段々畑になつていてパインナップルが多く栽培されてあつた。長芋が多くあつて、掘つてきてはトロ口芋にして良く食した。セブ島の討伐は夜襲攻撃ばかりであつた。薄暮を利用して出て行つた討伐である。椰子の葉蔭から月の光が流れてきて南十字星が輝く夜、通信隊が二名配属されていた。たまたまニッパハウスの一軒家があつた。其の中で交信を始めていた。「ヤラレタ」と叫び声で救助に行き、近づいて見ると、腹部首貫で残念にもすでに命が絶えてい

た。他の一人が「動かないで、動くと言が飛んで来る」というので腹這いになって伏せていた時、左足にパッシイと感じた。幸いにして編上靴の踵で無傷で助かった。再度のお陰をいただき感謝の外ない。

銃声もおさまり、間を見て後方に下った。セブ島も一応安定してきて住民も帰って来るようになってきた。突然に中村曹長殿が迎えに見えた。何だろうと思つて行くと、初年兵が入隊して帰還兵の準備に忙しく、證明書等書類整理作成である。漸く帰還の日が来たと思つた処、衛生兵は初年兵の教育があつて自分一人残ることになり、本科兵は別れを告げ帰途につき、ただ一人で茫然としていた。

初年兵の基本教育が終わり帰還する事になり、セブで別れを告げ見送つて貰つた時涙がこぼれてきた。健闘を祈つたルソン島の連隊本部に引上げて、軍旗に遥拝、連隊長殿に申告を済ましてマニラ港を出港、十二月無事に生還。

今ここに五十回忌を迎え、英霊の佛前に祭文を奉読して、ひしひしと胸を打つ。生前を偲び合掌。平穩に

過ごせる今日の喜びこそ、ご加護の賜と感謝の念で一杯である。壮烈無比なる戦死を遂げられた武勲は、平和の礎として永久に光彩を放つものである。

ミンダナオ戦線従軍記

愛知県 大矢 昌 男

独立歩兵第六十四大隊第一中隊要員として広島に着いたのが昭和十八年四月三日だった。輸送船に乗せられ五月十七日にミンダナオ島ダバオに到着、一期検閲後衛生兵となる。

十九年七月、大隊は移動討伐のため敵中突破して前進、バカデアンに向かう。小雨降る闇夜、部隊は蕭々と進む。湿地帯の一本道、前方はうすぼんやりと森らしい。突然パンパンと銃声、道の両側にびたりと伏しすぐに応戦、パンパンパンバリバリ、彼我の銃声は豆を煎るごとく……と、四、五メートル先でうなり声、あつ誰かやられたな！と思ひ首を上げる。